

(報告)

人は自分の体からにおいが発せられると不安を感じるか

— ストーマ保有者と非保有者との比較 —

梶原睦子¹⁾ 安田智美²⁾ 佐々木祐子³⁾ 青木詩恵⁴⁾ 田澤賢次⁵⁾

要 旨

ストーマ保有者のおい不安の特徴を記述するために、ストーマ保有者と非保有者のおい不安を比較した。人は、自分の身体からにおいを感じるとストーマの有無や体臭の種類に関わらず、不安が生起されることが明らかになったが、感知するにおいの強さと不安はストーマ保有者が有意に高かった。その理由として、便臭そのものが腐敗臭を帯びた危険を意味するにおいであること、いつにおいが発生するかわからない不確実性が強いこと、便臭の社会的な許容度がせまいことなどの理由が考えられ、におい不安は、嗅覚だけではなく、文化や環境、嗅覚以外の認知的要因にも影響されていると考えられた。

今後看護として、情緒的、教育的、実践的な面を含むにおい不安へのケアの構築を考えていく必要がある。

キーワード：におい不安 ストーマ保有者 非ストーマ保有者

1. はじめに

ストーマとは、元来ギリシャ語で“乳頭状に突出した口”を意味するが、医学的には疾患の治療目的で、消化管や尿路を人為的に体外に誘導して、造設した開放孔で、前者を消化管ストーマ、後者を尿路ストーマという¹⁾。

ストーマは括約筋機能を持たないので、完全失禁となる。現在の標準的なストーマ管理は、体外式の粘着性装具装着によって括約筋機能を代行させている。装具の材料となるポリマー工学の発展により、標準的管理をしていれば、排泄物のおいには漏れないとされている。しかし腹部から排泄がある以上、ストーマ保有者は、排泄物を身近に感じているので、そのにおいに関して、不安や緊張を感じ、それが生活行動に影響している可能性がある。

進藤²⁾は、ストーマ保有者が口には出せない3大問題を、性機能障害、便臭・尿臭、放屁音で

あると指摘し、においについて、ストーマ保有者にインタビューしたところ、以下のような反応があったという。「新しい装具に変えたのに公衆の中で糞臭がする」「漏れていないはずなのに、服に臭いがしみついている」「カーテンで囲まれた病室で装具交換のときにおいで隣の人にストーマであることがわかってしまう」「周囲の人が自分を嗅ぐ」「臭気がつねに漂っている」などであったが、それに対して多くの医療従事者は「医学的に見てありえない」「気のせいだ」と取り合ってくれないと、おおかたのストーマ保有者が言っていたと述べている。

わが国での、ストーマ保有者最大の団体である日本オストミー協会では、3年毎に「オストメイト生活実態基本調査」を行っている。第5回調査報告(2004)³⁾および第6回調査報告(2007)⁴⁾によれば、生活上問題となる悩みでは、「便・尿漏れやにおい漏れ」がそれぞれ、全体の38.3%、

(所 属)

1) 山梨県立大学看護学部 成人看護学領域

2) 富山大学医学部看護学科

3) 新潟青陵大学看護福祉心理学部

4) Convatec Japan 株式会社

5) 富山医科薬科大学(現富山大学)名誉教授

48%であった。第7回調査報告(2011)⁵⁾では、さらに「便・尿漏れ」と「におい漏れ」を個々の項目として調査しているが、「便・尿漏れ」は41.1%、「におい漏れ」は36.0%という結果であった。この数値からもストーマ保有者にとってにおいの悩みが日常的に存在していることは明白である。青木⁶⁾は、ガス音やにおいは、ストーマ保有者にとって長期的な未解決問題であると指摘している。しかし、ストーマ保有者のにおいに関する研究は、十分であるとはいえない。

わが国で、においに関する内容を含んだ報告が散見されるのは、1990年後半であり、においやその対処の実態調査や消臭・脱臭剤の効果に関する調査である。

においや、その対処に関する実態調査では、岡田ら⁷⁾は、ストーマ保有者145名への質問紙調査で、7割が「臭いが気になる」と回答したことを報告し、これまで医療者の中では「臭い」について問題視されてきていなかったが、これからは、装具自体の改良を含めた対策が必要であると指摘している。

梶原ら⁸⁾は、ストーマ保有者の中で、「自分も他人にもおうと思う人」のほうが「自分だけにおうと思う人」よりも日常生活に支障があると認識し他者に迷惑をかけていると認識している人が有意に多かった報告している。

わが国では、消臭剤の効果に関する調査⁹⁻¹⁵⁾が多い。これらの効果の測定方法は、一定期間ストーマ保有当事者に消臭剤を使用してもらい、本人の主観的評定や機器測定により測定したもので、すべての報告において一定の効果ありと結論づけられている。

しかし、一方で、消臭剤の効果を疑問視する報告もある。当事者インタビューや臭気の測定をした結果、消臭剤や消臭フィルターの機能や効果が不十分であると指摘した報告¹⁶⁻¹⁸⁾では、装具の改良の余地があるとしている。

梶原ら¹⁹⁾は消臭剤使用が実際の日常生活でのにおい不安までを解消するかについて調査し、消臭剤使用していても日常生活場面の状況によってその効果は変化しうると報告している。そ

して実際にストーマ保有者はどのようなにおい管理をしているかをみた調査では、排泄物の除去、入浴シャワー、補装具の出口をきれいに保つなどの方法が多く各種消臭剤などの使用頻度が低い結果であったことが報告されている²⁰⁾。

さらに、梶原は²¹⁾、ストーマ保有者120名を対象として、におい不安を生起させる環境刺激、認知、反応について質的分類を行った。環境刺激では、人のいる閉鎖空間、工作中、友人知人と一緒という対人環境や、実際の臭気感知が刺激となって、不安反応が生起されていた。不安反応には、においを軽減させる対処努力や、場面回避をするという行動、不安、心配、緊張を感じる感情、冷や汗が出る、ひやっとするなど生理が見られたが、便だからにおはずという確信や、周囲の人の反応からに思っていると思ひこむという認知も関与していたことを明らかにしており、この結果から、消臭剤使用だけでは、ストーマ保有者のにおい不安は解決しないと述べている。

欧米では、1960年代から、消化器ストーマ保有者の心配事として、においと排泄物の漏れ、仕事や日常生活、性生活の3点があげられ、特ににおいと排泄物の漏れは上位にあることが報告されていた²²⁻²⁵⁾。Piper²⁶⁾は、消化器ストーマ保有者67名について退院前と退院後の2回にわたってストーマによる心配事を調査した結果、最も多かったのが、排泄物の漏れとおいの問題であったと報告している。Mitchell²⁷⁾は、ストーマ保有者174名を対象として、ストーマによる困惑とQOL、個人属性との関連についての調査を行い、気まずさを感じているほどQOLが低く、気まずさは、排泄物の漏れ、においや音に影響されることを報告している。Lynch²⁸⁾は、消化器ストーマ造設者332名を対象として術後5ヶ月、1年、2年の3時点について心配の内容を調査し、においの心配を訴えたストーマ保有者は、術後5ヶ月で40.7%、1年で43.1%、2年では31.2%であったと述べている。ケアについては、においコントロールとして、食品選択と、装具交換が推奨される²⁹⁾³⁰⁾にとどまっている。

以上により、ストーマ装具は発達したが、ストーマ保有者には、いまだに、におい不安が存続しており、それに対応させたにおいのケアが必要であることは、医療者間では一致していると考えられる。しかしながら、ストーマ保有者のにおい研究は、未だケアに結びつくまでの体系化された議論にまで至っていない。

人間は、視覚動物といわれるように、外界情報の約85%を視覚から入手している³¹⁾。においは、視覚化できず、実体のないつかみ難いものであり、判断が困難なため、生理学における五感の研究の中でも嗅覚研究は遅れを取ってきた³¹⁾。これに対して、鈴木³²⁾は、人間が歴史的にも嗅覚に対して払ってきた関心の相対的低さも関連するとしている。

しかし Buck&Axel³³⁾が、分子生物学的な視点から、嗅細胞のにおい受容器の構造を決定する遺伝子を発見したことで、2004年にノーベル医学・生理学賞を受賞したことがきっかけになり、嗅覚研究がさかんに行われるようになってきており、除々に、人間の日常生活上で経験する嗅覚の現象を説明している報告も始まってきた。ストーマ保有者のにおい不安に関しても、におい不安が生起する場面やその構造についての調査を進めていく必要がある。しかしながら、ストーマ保有者のにおい不安を考える時に、視野にいれなくてはならないことは、人はもともと自分からにおいを発することに対して不安傾向になると言われていることである。

現代は、かつてないほど無臭志向が強くなり、デオドラント剤の売れ行きの高さに示される現象は、人は普遍的に、自分から発せられるにおいそのものに対して過敏になる性質があるということをも物語っているようでもあり、この文脈にのっとれば、におい不安はストーマ保有者だけに存在する特別なものではないということになる。

そこで、人は本当に自分の体からのにおいが発せられると不安を感じるのかを調査によって確認したうえで、ストーマ保有者とストーマを持たない人との間で、そのにおいの感じ方や不安

に差異があるかについて検討することが重要である。それによって、ストーマ保有者のにおい不安の特徴や構造が浮上し、より明確な記述が可能になるとと思われる。

この調査は、1999年に、「オストメイトが感じているにおい」というテーマで、筆者らが、日本ストーマリハビリテーション学会で発表したものである³⁴⁾。本調査で示された結果が、におい研究の出発点としてあらためて意義があると考えたので、今回投稿するものである。

なお、「におい」の表記として、「匂い」、「ニオイ」、「臭い」がある。現在では「におい」が一般的になっている³⁵⁾ため、本論文では「におい」と表記するが、文中の引用文献中の表記は原文のままとする。

2. 目的

人は自分の体からのにおいが発せられると不安を感じるのかを確認したうえで、ストーマ保有者と非保有者との間で、においの種類や感じ方に差異があるかについて検討し、ストーマ保有者が感知しているにおい不安の特徴について記述する。

3. 方法

1) 対象

本報告では、消化器ストーマ保有者を対象とした。ストーマ保有群として、某地方2県の日本オストミー協会支部の会員の中から、消化器ストーマ保有者(以下ストーマ群)160名を無作為に抽出した。コントロール群は、ストーマを保有せず、現在重篤な身体疾患や精神疾患に罹患していない対象(以下非ストーマ群)を、ストーマ群と人数、性別、年齢、職業の有無についてマッチングさせて選んだ。

2) 調査内容

質問紙は、(1)基本属性、(2)においの感知の実際、(3)性格特性を問う内容から構成した。

(1)基本属性:ストーマ群は、年齢、性別、職業の有無、ストーマ保有年数とした。非ストーマ群

は、年齢、性別、職業の有無とした。

(2)においの感知の実際

においの感知を、「普段の生活で自分の身体から感知するにおい」と定義し以下の4点について調査した。ストーマ保有者には、装具をつけている状態で普段の生活で自分の身体から感知するにおいと教示した。

①においを感じる強さ：「感じない(1点)」「かすかに感じる(2点)」「少し感じる(3点)」「らくに感じる(4点)」「強く感じる(5点)」の5段階評定³⁶⁾とした。

②感知するにおいの種類：感知するにおいの種類として、便、尿、口臭、足、汗、腋の下、体臭、その他の中から、通常もつとも感じるにおいを一つだけ選択するように依頼した(①で「感じない」と回答した以外の対象者)。

③においを感じる頻度：「感じない(1点)」「たまに感じる(2点)」「時々感じる(3点)」「しばしば感じる(4点)」「いつも感じる(5点)」の5段階評定³⁶⁾とした。

④においによって感じる不安：「感じない(1点)」「かすかに感じる(2点)」「少し感じる(3点)」「感じる(4点)」「強く感じる(5点)」の5段階で評定した。

(3)性格特性

におい感知の実際との関連をみるために、矢田部ギルフォード性格検査法(以下YGテスト)の下位尺度中から、情緒不安定因子である、抑うつ性(D尺度)、劣等感(I尺度)、神経質(N尺度)、社会的外向性(S尺度)の4尺度を選択した。D尺度は陰気で悲観的気分を測る尺度で、以下、I尺度は劣等感、自信の欠如や自己に対する過小評価、N尺度は神経質心配性、神経質、傷つきやすさ、S尺度は社会的で対人接触を好む傾向を測定し、その逆は対人的接触を避ける社会的内向を示す³⁷⁾。

3)倫理的配慮

ストーマ群に対しては、日本オストミー協会の支部長あてに、文書にて調査の趣旨と方法を説明し、承諾を得てから、無作為に選んだ会員

の会報に説明文と質問紙を同封してもらい、返信をもって同意が得られたこととした。その際、会員には、①回答は自由意志に基づくものであること、②無記名で行い回答内容や個人情報が漏出することはないこと、③調査への参加が協会会員であることへの利益・不利益に影響することはないこと、④調査者側は会員の住所や氏名などの個人情報は知りえないことを記載した。

非ストーマ群は、当時の筆者らの所属大学の職員や調査グループの家族や知人などに依頼して収集した。その際、自由意志での参加と、匿名性の保持について保証し、同意の得られた対象に実施した。当時は、筆者らの所属していた看護学科内に倫理審査委員会はなく、倫理審査委員会の承認を受けていないが、教室の教授(富山医科薬科大学医学部看護学科 田澤賢次教授)がオストミー協会支部長との話し合いの上、倫理的に問題はないという合議が得られた結果で実施したものである。

4)実施期間

平成11年8月~10月であった。

4. 結果

1)対象の背景(表1)

対象は、ストーマ群93名(回収数120(75%)のうち無効回答を削除)で、男性48名、女性45名で、平均年齢は63.2±7.2歳、平均ストーマ保有年数は、12.8±7.7年であった。

非ストーマ群は82名で、男性38名、女性44名、平均年齢は62.9±7.48歳であった。有職者はストーマ保有者37名、非保有者29名であり、性別、年齢、有職率について両者間で統計的有意差は認められなかった($\chi^2(1)=0.36, p=0.54$)、($t(173)=0.26, p=0.78$)、($\chi^2(1)=0.48, p=0.48$)。

表1 対象の背景

	ストーマ群 n=93	非ストーマ群 n=82
性別		
男性	48名(51.6%)	38名(46.3%)
女性	45名(48.4%)	44名(53.6%)
平均年齢	63.2±7.25歳	62.9±7.48歳
平均保有年数	12.8±7.7	
職業		
あり	37名(39.8%)	29名(35.4%)
なし	56名(60.2%)	53名(64.6%)

2) 感知するにの実際

① 感知するにの (図 1)

感知するにの強さで、にのを感じないとした人数は、ストーマ群 21 名(22.6%)、非ストーマ群 22 名(26.8%)であった。にのを感じるとした人が感知するにの種類は、ストーマ群では、便臭が最も多く 52 名 (72.2%) 次に汗、口臭、尿臭がともに 3 名 (4%) で、その他と回答した 5 名は、排ガスであった。非ストーマ群は、汗が 19 名(26.3%)、口臭 15 名(24.5%)、腋臭 6 名(9.8%)、足 3 名(4.8%)の順に多く、便臭が 5 名(8%)であった。

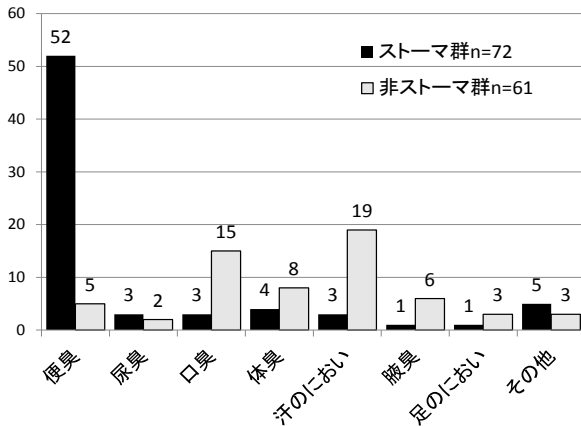


図 1 自身のからだからもっとも強く感知するにの種類(人数)

④ 感知するにの強さ、頻度とにの感知による不安との相関(表 2)

感知するにの強さ、頻度とにの感知による不安の間の相関を見るために、ストーマ群、

非ストーマ群ごとに、スピアマンの相関係数を求めた。その結果は、両群ともに感知するにの強さ、にの頻度と不安の間に $r=0.71\sim 0.75$ の強い正の相関が認められた。すなわち、人は自分の体からのにの感知することで、ストーマ保有の有無や感知するにの種類にかかわらず不安が感じられることが明らかになった。

表 2 にの強さと頻度と不安の相関

	にのによる不安	
	ストーマ群	非ストーマ群
感知するにの強さ	0.73**	0.71**
感知するにの頻度	0.75**	0.71**

**p<0.01

① 感知するにの強さ、頻度、にの感知による不安得点平均値の比較(表 3)

ストーマ群と非ストーマ群で、感知するにの強さ、頻度、にの感知による不安得点の平均値の比較を行った。ストーマ群のにの強さは 2.63 ± 1.18 、頻度 2.32 ± 1.11 、にの感知による不安は 2.58 ± 1.32 であり、非ストーマ群では、にの強さが 2.26 ± 1.06 、頻度が 2.27 ± 0.94 、にの感知による不安が 1.95 ± 1.04 であり、いずれもストーマ群の得点の方が高く、にの強さと、にの感知による不安の得点において有意差な差があった。

表 3 感知するにの強さ・頻度・不安の得点比較

	ストーマ群 n=93	非ストーマ群 n=82	t 値	p
	平均値±SD	平均値±SD		
にの強さ	2.63±1.18	2.26±1.06	2.15	0.03
にの頻度	2.32±1.11	2.27±0.94	0.24	0.80
にの感知による不安	2.58±1.32	1.95±1.04	3.70	0.00

表 4 性格特性とにの感知の相関

YG テスト項目	にの強さ		にの頻度		にのによる不安	
	ストーマ群	非ストーマ群	ストーマ群	p 非ストーマ群	ストーマ群	p 非ストーマ群
D 尺度	0.19	0.19	0.3	** 0.006	0.33	** 0.22
I 尺度	0.2	0.19	0.3	** 0.129	0.36	** 0.28 *
N 尺度	0.18	0.18	0.27	** 0.076	0.3	** 0.27 *
S 尺度	-0.77	-0.74	-0.23	** -0.05	-0.4	** -0.18

*p<0.05 **p<0.01

3) においの感知と性格特性との関連 (表)

においの感知と性格特性の間の関連を検討するために、感知するにおいの強さ、頻度、におい感知による不安と YG テストの D 尺度、I 尺度、N 尺度、S 尺度との間のスピアマンの相関係数を求めた。

においの強さと尺度の間には、両群ともに有意な相関はなかったが、においの頻度では、ストーマ保有群のみ、D 尺度、I 尺度、N 尺度に $r=0.27\sim 0.3$ の有意な正の相関があり、S 尺度には $r=-0.23$ と有意な負の相関が見られた。におい感知による不安・緊張では、ストーマ群では、D 尺度、I 尺度、N 尺度に有意な正の相関があり、S 尺度には有意な負の相関が見られ、非ストーマ群では、I 尺度と N 尺度との間に有意な正の相関があった。

5. 考察

本調査の目的は、人は自分の体からにおいが発せられると不安を感じるのかを確認したうえで、ストーマ保有者と非保有者との間においの種類や感じ方の差異に着目し、ストーマ保有者が感知しているにおい不安の特徴について記述することであった。

1) 人は自分の体からにおいを感じることで不安を感じるか

今回の調査対象者は、自分の身体から、便臭、尿臭、口臭、体臭、汗、腋臭、足のにおいなどさまざまなにおいを感じていた。これは特別なことではなく、「人間というのは、匂いを嗅ぐものであると同時に匂いを発する「匂う」者である」³⁸⁾という言葉に示されるとおりである。

ストーマ群と非ストーマ群では、感知するにおいの種類は異なっていたが、感知するにおいの強さおよび頻度と不安の間の相関係数は両群ともに $r=0.7$ 以上と高く、ほぼ同等な値を示していた。

自分からにおいがしていると感じると、人は不安になることを我々は、感覚的に感じているが、今回の結果から、人は、自分の体からにお

いを感じることで不安になることが確認できた。それでは、なぜ不安になるのだろうか。

五味³⁹⁾は、その理由について、人は、他者から「クサイ」と言われると、それが人の中に、一種の加害者意識を生じさせるので、何を言われるより傷ついてしまうからであると説明している。さらに、容姿や外見に対する表現で、人を馬鹿にする言葉はたくさんあるけれども、そうした言葉を投げつけられても、外見については自分の一部に過ぎないと割り切って感じる事が出来るのに対して、「クサイ」という言葉自体が目に見えない曖昧なものであるために、全人格を否定されたような気持ちになるのだと述べている。そのため、体臭で悩む人はしばしば社会生活にも支障をきたす。

体臭の感知が、社会的孤立を引き起こす障害として、自己臭恐怖がある。自己臭恐怖とは、「自分の体から不快なおいが出て周囲の人にいやな思いをさせ、そのために自分が他人から忌避される」とする対人恐怖のひとつである⁴⁰⁾。

山下⁴¹⁾は、自己臭恐怖を、自己視線恐怖、醜形恐怖とともに、確信型対人恐怖というグループに位置づけ、確信型対人恐怖は、自分の臭いや視線、表情や容姿など対人性をもつものの中に欠点があると自分自身で強固に確信することが特徴であるとしている。

その欠点の確信によって、その人の中に加害者意識が生じ、周囲から忌避されるという他者を巻き込んだ症状が形成される。自己臭恐怖は、DSM-IVでは、身体表現性障害に分類される精神疾患であるが⁴⁰⁾、この傾向は健常人にも存在すると考えられる。

佐々木⁴²⁾は、対人恐怖症者は自分が相手を不快にしていると感じ(加害感)その結果相手に嫌われていると感じる(忌避感)として、大学生男女 220 名について加害感とそれによって抱く忌避感の間の相関について調査した。他者を不快にしてしまう原因となる 14 項目を抽出し、加害感と忌避感の間の相関係数を求めたところ、「自分の体臭・口臭・髪のおい」における項目の相関係数は $r=0.55$ であった。つまり、体臭

は加害感と忌避感双方に影響することが明らかになった。

この加害感と忌避感は、マズロー⁴³⁾の安全欲求や、所属欲求を疎外していると考えられることもできる。マズローの階層表ではこれら2つの上に、高次の自己実現の欲求があり、安全欲求や所属欲求は、人間がよりよく生きていくうえで重要な位置にあることを示すものである。これらが脅かされることで、人は不安を生じるとも考えられる。

さらに、体臭やにおいそのものを嫌う傾向は、文化の影響を大きく受けていると考えられる。耐えられる限界の匂いの強度がその時代、地域、文化、衛生施設、食生活、経済状態によって変動する可能性がある⁴⁴⁾。現代はかつてないほどの無臭文化である。

鈴木⁴⁵⁾は、匂いとは、「本来悪臭でも芳香でもない単なる「におい」として存在する。それをどう感じるかを決めているのが、広い意味での文化である」として、「悪臭があるのではなく、悪臭として感じられるものがあるということである」と言う。

嗅覚は、大脳辺縁系での反応であり、視覚や聴覚よりも原始的で動物的な本能行為とみなされるため、我々はおいを、文化や文明に逆行するものと捉えてしまうのかもしれない。

山内⁴⁶⁾は、「人間は、動物に戸籍を持ちながら、できるだけ動物から逃走し、動物性を拒否し、動物であろうとしない逆行性動物」と記述しているし、鈴木⁴⁷⁾も「我々は、人間の中にある動物的な本能を抑圧することで成立する『文化』の中でしか生きられない」と述べている。また、アランコルバン⁴⁸⁾は、著書の中で、フランス革命前後のパリの人々は、耐えられないような臭気の中で暮らしていたが、公衆衛生学や当時の医学の最新の知識が糞尿を含む悪臭の危険性、病原性に警告を発した結果、衛生志向が強くなり、体臭と不潔を単純に結びつける結果になったことを解説している。

2) ストーマ保有者におけるにおいの感知の特徴

ストーマ保有の有無やにおいの種類に関わらず、においを感知することが、人の中に不安を生起させることが明らかになった。しかし、ストーマ保有群と非保有群の間で感知するにおいの強度、頻度、においによる不安を比較した結果では、ストーマ群の方が、においの強度と感知による不安が有意に高いことがわかった。(表3)。

ストーマ群は、最も感知するにおいのうち57名79.2%が便臭と排ガスのにおいである。鈴木⁴⁹⁾は、体に由来するいろいろな匂いの他に、より強烈な匂いを発するものに排泄物があると説明している。特に、便臭は、食物中のたんぱく質を分解する腐敗菌である腸内細菌に分解され、アンモニア、硫化水素、インドール、フェノール、メルカプタンなどを産出する腐敗臭となる⁵⁰⁾。そのため、人が、便臭を特に強い悪臭として感じるのは、腐敗物の危険性に対する生体防御の働きとも考えられる。

また、便臭の主なにおい分子である、メチルメルカプタンは、 $1/10^4$ に希釈しても便臭として強く感じられるという特性がある⁵¹⁾。

しかしながら、感知するにおいの強度は、においの物性だけではなく、視覚刺激によっても影響されることがわかってきた。今田ら⁵²⁾は、実験参加者に、においと視覚的画像を同時に提示する実験で、提示したにおいと一致した画像を見せたときと、一致しない画像を見せたときとでは、一致したときのほうが、におい強度評定値が有意に高くなることを確かめた。つまりにおいに対する評価は、嗅覚だけで決定されるのではなく、視覚刺激の影響も受けていることが示された。体臭はにおいとして感じられるだけで、目に見えないが、ストーマ保有者の場合は、装具内ににおい源である便貯留を視認できるので、それが視覚刺激となり、においが増強されるのかもしれない。またストーマ保有者は、装具から便を排泄するたびに、便を間近で操作するので、毎回便臭と便が同時に提示されるため、古典的条件づけが強化され、条件づけに関与した一方の感覚刺激(便)が提示されるとそ

の条件づけで形成された感覚の連合野の記憶が活性化され、装具内の便を見ただけで、あたかも実際におおように感じてしまっている可能性もある。

不安に関しては、においに関する認知的要因が、においの快不快、順応過程に影響していることを坂井ら⁵³⁾が報告している。におい源に否定的な印象をもっている場合ほど、人はそのにおいに対して不快感やにおいを強く感じ、順応しにくくなる傾向があることを報告している。ストーマ保有者にも同様の現象が起こっていると推測できる。

梶原⁵⁴⁾は、SD法を用いて人が便に対して抱くイメージ調査を行ったところ、「汚い」「触りたくない」「隠したい」「不潔」「洗いたい」「流したい」というイメージを持っていることがわかった。体臭よりも便臭をより不安に感じるのも、便そのものに対するイメージが否定的であることと関係しているとも考えられる。

YGテストとにおい感知の相関の結果では、においの強さと尺度間には、両群ともに相関はなかったが、においの頻度において、ストーマ保有群にのみ、すべての尺度との間に有意な相関があった。

ストーマ群での、においを感じる頻度が高ければ、抑うつ性、劣等感、心配性、社会的内向性が高くなるという傾向は、ストーマ保有者のにおい不安をストーマの構造上の特性という視点から改めて考える必要性を示唆している。

ストーマ保有者の特徴は、においの源である排便や排ガスが不随意に出るために、いつにおいが発生するかわからない状況であり、そのような中では、においを感知する回数は、情緒的に不安定にならざるを得ない回数となることを意味する。

口臭や体臭、汗や足のにおいも、簡単にコントロールできるものではないが、においがいつ発生するかわからないという不確かさは、ストーマ保有者の方が圧倒的に高い。

においは、現実的には、排泄物の漏れを予期させるものである。予期せぬ排泄物の漏れは、

排泄の自律性を喪失させることで、自尊感情や自己効力感の低下を招き、社会的接触をさけるようになると考えられる。

また、多くのストーマ保有者は、自分のストーマ保有を他者に積極的に知らせることを好まない。つまり、においの発生は、前述の加害感や忌避感のほか、周囲にストーマの存在を知られてしまうという危惧も含まれると考えられ、ストーマ保有者のにおい不安の高さにも関連すると思われる。また、においを発生させる原因に排ガスがあり、不安の中には放屁音の脅威が入っているであろうことも想像に難くない。

さらに、においは文化や社会的習慣や思想などの影響を受けると言われている。あくまでも、筆者らの推測であるが、現代の日本のようにインフラ整備が進み、人が排泄物臭に晒される機会が少なくなると、便臭は、他の体臭よりも社会的に容認されず、ストーマ保有者が便臭を恐れることに拍車をかけているようにも思われる。

この結果は、相関係数による統計なので、ストーマ保有者は、においを感じる頻度が高ければ、抑うつ性、劣等感、心配性、社会的内向性が高くなるという傾向があると同時に、抑うつ性、劣等感、心配性、社会的内向性の情緒不安因子が高い人ほど、におい発生に敏感であるという解釈も可能であろう。

バウアーは、感情は認知バイアスをもたらすという実験を行い、悲しい気分ときは、悲しい内容の連想がおこり、逆に楽しい気分ときは、楽しい内容の連想がおこることを実験によって確かめ、「気分一致効果」と呼び、人は、認知から感情がおこるだけでなく、感情から認知が起こりうることを示した⁵⁵⁾。このことから、情緒不安定になるような心理的原因が存在するストーマ保有者は、においに敏感になっているという仮説も考えられるだろう。Williamsは、においの看護として、情緒的サポート、情動的サポート、実践的サポートが必要である³⁰⁾と述べているが、においのケアとして、今後、それらを総合的に実践していく方略を構築することが重要である。

6. まとめ

- 1)人は、自分の身体からにおいを発していると思うと、ストーマの有無や体臭の種類に関わらず、不安が生起されることが示唆された。
- 2)ストーマ保有群は、感知するにおいては便臭が多く、非ストーマ群よりも感知するにおいの強さとおいによる不安が有意に高かった。
- 3)ストーマ保有者が便臭を強く感じ、不安緊張に敏感になっている理由として、便臭そのものが腐敗臭を帯びた危険を意味するにおいであること、いつにおいが発生するかわからない不確実性が強いこと、便臭の社会的な許容度がせまいことなどの理由が考えられた。
- 4)におい不安は、嗅覚だけではなく、文化や環境、嗅覚以外の認知的要因にも影響されていると考えられた。
- 5)今後看護として、情緒的、情動的、実践的なサポートを含むにおいのケアの構築を考えていく必要がある。

7. 研究の限界と課題

対象としたストーマ保有者が某地方の患者会に限定されており、人数も限られていたことから結果をすべて普遍化することはできない。また、調査期間が夏季であったので、感知するにおいが、汗や腋臭に関する回答の多さに影響した可能性がある。分析の際にストーマ群には、便臭以外のにおいを選択した人もいたが、今回はストーマ群として、一括して分析しており、また、ストーマ群でも20%はにおいを感じない人も存在したため、今後、におい感知と属性との関連に対する詳細な調査が必要である。

謝辞

この調査にご協力いただきました、オストミー協会の会員の皆様、ストーマ群としてご協力いただきました方々に深謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 日本ストーマリハビリテーション学会:ストーマリハビリテーション学用語集,金原出版,7,1997.

- 2) 進藤勝久:ストーマリハビリテーション学,175-176,永井書店,2007.
- 3) 社団法人日本オストミー協会:第5回オストメイト生活実態基本調査報告書,21,2004.
- 4) 社団法人日本オストミー協会:第6回オストメイト生活実態基本調査報告書,22,2007.
- 5) 社団法人日本オストミー協会:第6回オストメイト生活実態基本調査報告書,21,2011.
- 6) 青木和江:ストーマケアのDynamism, WOC Nursing, 2(3),93-95,2014.
- 7) 岡田祐子:ストーマ患者の「臭いについての意識」アンケート調査より,日本ストーマ学会誌,17(2),53,2001.
- 8) 梶原睦子,飯野弥,金丸明美,江口英雄:オストメイトのにおいの感知が日常生活に及ぼす影響,日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会誌,25(3),164,2009.
- 9) 佐々木迪郎,春日井貴美恵,国井康男ほか:オストメイトに対する人参葉末「グリーンエンゼル」の使用経験,日本ストーマ学会誌,10(31),65,1994.
- 10) 小出昭彦,古庄奈美,春日井貴美恵ほか:オストメイトに対する人参葉末「グリーンエンゼル」の使用経験アンケートからの消臭効果について第Ⅱ法用量設定研究,日本ストーマ学会誌,10(3),88,1994.
- 11) 石川ゆり子,國井康夫,オストメイトに対する人参粉末「グリーンエンゼル」の使用経験,日本ストーマ学会誌,11(1),86,1995.
- 12) 遠藤俊吾,小川健治,加藤博之:オストメイトに対する消臭機能性食品「シュークリーン」の効果,日本ストーマ学会誌,11(3),110,1995.
- 13) 津田恭子,真田弘美,片田真理子ほか:消臭剤付きストーマ袋の使用評価,日本ストーマ学会誌,16(1),55-59,2000.
- 14) 木村かおり,前田司子,滝吉糸子ほか:緑茶飲用による便の消臭効果について,日本ストーマ学会誌,18(3),182,2002.
- 15) 辻伸之,Murahata RI, Jay H ほか:消臭と潤滑効果を併せ持つストーマ袋用添加剤のユーザー評価,日本ストーマ学会誌,20(3),55,2004.
- 16) 松井禎子,長谷陽子,藤田ひと美ほか:ガス抜きフィルターの有効性についての検討,日本ストーマ学会誌,11(2),60,2004.
- 17) 長谷陽子,松井禎子,藤田ひとみほか:ストーマ袋内消臭剤は便臭を消すか?日本ストーマ学会誌,18(3),184,2002.
- 18) 長谷川陽子,松井禎子,藤田ひと美:ガス抜きフィルターは完璧ではない,日本ストーマ学会誌,18(1),33,2002.
- 19) 梶原睦子,根本秀美,沓掛裕美ほか:消化器オストメイトが抱く日常場面におけるにおいの不安と消臭剤使用後の変化,日本ストーマ学会誌,23(1),110,2007.

- 20) 梶原睦子,根本秀美,大野佳子ほか:オストメイトが
とっているにおい対策,日本ストーマ学会誌,21(3),
58,2005.
- 21) 梶原睦子:消化器ストーマ保有者の「におい」にま
つわる環境・認知・反応,応用心理学研究,39(1),
53-60,2013.
- 22) Druss RG,O'Connor JP,Prudden JF,Stem LO:Psychologic
respose to colectomy.Arch Gen Psychiatry,18,53-9,1968.
- 23) Druss RG,O'ConnorJP,Prudden JF,Stem LO:Psychologic
respose to colectomy II Adjustment to a permanent
colostomy,Arch Gen Psychiatry,20,419-427,1969.
- 24) Eardley A,Geore DW,Davis F,et al:Colostomy:the
consequence of surgery,Clin Oncol,2,277-283,1976.
- 25) Pryse-Phillips W:Follow-uo study of patients with
colostomies,Am J Surg,122,27-32,1971.
- 26) Piper.B,Mikols.C:Predischarge and Postdischarge Concerns
of Persons With an Ostomy,J Wound Ostomy Continence
Nurs,23(2),105-109,1996.
- 27) Mitchell KA,Rawl SM,Schmidt CM:Demographic,clinical
and quality of life variables related to embarrassment in
veterans living with an intestinal stoma,J Wound Ostomy
Continence Nurs,34(5),524-532,2007.
- 28) Lynch BM,Hawkes AL,Steginga et al:Stoma surgery for
colorectal cancer:a population-based sudy of patient
concerns,J Wound Ostomy Continence Nurs,35(4),
424-428,2008.
- 29) BeartRW,CurleeF:Intestinalstomas:managementthe”
Unmentinable”,Geriatrics,33(11),1978.
- 30) WilliamsJ:Flatus,Odor and the ostomist:coping strategies
and interventions,British Journal of Nursing,17(2),2008.
- 31) 内哲嗣郎:においかおり 実践的な知識と技術,85,フ
レグランスジャーナル社,2006.
- 32) 鈴木隆:匂いの身体論 体臭と無臭志向,八坂書房,
165,1998.
- 33) Buck,L. and Axel,R. Cell 65,175-187,1991.
- 34) 梶原睦子,安田智美,小林祐子ほか:ストーマ保有者
における「におい」の認知,日本ストーマ学会誌,
15(3),54,1999.
- 35) 川崎道昭,堀内哲嗣朗:嗅覚とにおい物質,社団法人
においかおり環境協会,2,2004.
- 36) 環境庁大気保全局大気生活環境室編著:快適なお
い環境づくりに向けて,ぎょうせい,35-36,2000.
- 37) 高山巖:谷田部ギルフォード性格検査法,心理アセス
メントハンドブック,西村書店,129-142,1993.
- 38) 鈴木隆:匂いの身体論 体臭と無臭志向,八坂書房,2,
1998.
- 39) 五味常明:もうニオイで悩まない,ハート出版,12-15,
1998.
- 40) 朝倉聡:自己臭恐怖,こころの科学,167,50-55,2013.
- 41) 山下格:対人恐怖の病理と治療,精神科治療学,12,
9-13,1997.
- 42) 佐々木淳:なぜ人は嫌われていると感じるのか,永房
典之編著なぜ人は他者が気になるのか,金子書房,
60-72,2008.
- 43) 産業能率大学出版編:フランク・ゴッフル小口忠彦
監訳:マズローの心理学,83,1993.
- 44) 鈴木隆:匂いの身体論 体臭と無臭志向,八坂書房,
105,1998.
- 45) 鈴木隆:匂いの身体論 体臭と無臭志向,八坂書房,
220,1998.
- 46) 山内昶:タブーの謎を解く,ちくま書房,17,1996.
- 47) 鈴木隆:匂いの身体論 体臭と無臭志向,八坂書房,
153,1998.
- 48) アランコルバン:山田登世子,鹿島茂訳,においの歴
史,藤原書店,117-170,2004.
- 49) 鈴木隆:匂いの身体論 体臭と無臭志向,八坂書房,86,
1998.
- 50) 鈴木隆:匂いの身体論 体臭と無臭志向,八坂書房,92,
1998.
- 51) 鈴木隆:匂いの身体論 体臭と無臭志向,八坂書房,96,
1998.
- 52) 今田純雄,坂井信之,斉藤幸子ほか:ニオイと視覚刺
激との一致不一致がニオイの快不快評定に及ぼす
効果,日本味と匂学会誌,10,811-814,2004.
- 53) 坂井信之,小早川達,斉藤幸子:認知的要因がにおい
の知覚と順応過程に及ぼす影響,におい・かおり環
境学会誌,35,22-25,2006.
- 54) 梶原睦子:排泄の心理学,穴澤貞夫,後藤百万,高尾良
彦ほか編,排泄リハビリテーション,理論と臨床,中
山書店,18-25,2009.
- 55) 丹野義彦:エビデンス臨床心理学,日本評論社,45-49,
2001.

Do People Become Anxious when Feels Odor from one's Body?:

Comparison of Ostomates and Non-ostomates

KAJIWARA Mutsuko, YASUDA Tomomi, SASAKI Yuko,
AOKI Utae, TAZAWA Kenji

key words: odor anxiety, ostomate, non-ostomate